
魔法戦記リリカルなのは To be tomorrow

酔仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカカルなのは T o b e t o m o r r o w

【Nコード】

N 8 1 2 9 L

【作者名】

酔仙

【あらすじ】

ある日のミッドチルダ地上本部長室、そこへ呼び出されたなのは達、呼び出したのはレティ提督だった。

レティは見抜いていた、彼女たちが以前のランクアップ試験で手抜きしていた事を、そして言い渡されたのは、SSS へのランクアップ試験に合格する事、

見返りに、新部隊の創設と特別戦技教導学校の新設を約束された。

直後に起きる事件、一つの命を救う事を諦めたなのはを窘めるスバル。

そして知るスバルの苦悩、なのはは、自分の小ささ、弱さを知って挫折を味わう。

そして、特別戦技教導学校の校長に就任する事を決意する。

プロローグ（前書き）

この小説は、私が始めて書いた物です。

A r c a d i a にも投稿した作品です（二重投稿作品です）

誤字、脱字が非常に多いかも知れませんが、表現のおかしい所も数多くあると思います。

平にご容赦を……

まあ、付き合ってやろうって言う人だけ読んで下さい。

注意：？血がいつぱい出ます。弱い方は読まない様に。

？内容が暗いです。鬱になるかも知れません。

？泣けます、覚悟して読んで下さい。

プロローグ

とある日のミッドチルダ地上本部・本部長室

「失礼します、高町一尉入ります」

「お久しぶりです、レティ本部長」

（JS事件終了後、数年間のゴタゴタを経て本部長に大抜擢されたのは、レティ提督だったのだ）

これは、それから暫く後のお話

「あれ？フェイトちゃんにハヤテちゃん」

更にドアが開いて

「失礼します、シグナムにヴィータ入ります」

二人が入ってくる。

「本部長、元六課メンバーを揃えて……何か面倒な事態でも？」

はやてが尋ねる。

「いえ、そうじゃないわ、今日はあなた達に説教しなければ行けない事があります。」

あなた達！この10年以上ランクアップ試験を受けて居ませんか？」

一同：ギクッ~~~~~

そう、この5人は、局入りしてからランクアップ試験を1回しか受けていない。

それも入局して1年後に受けただけ、それ以降は「忙しい」という理由で全く受けなかったのだ。

「JS事件の戦闘映像を見るに、ヴィータはともかく他の4人はどう見てもSSSランクを超えています。

ヴィータもまあ、Sランクか、頑張ればSSランクも行けるでしょう」

（どうしよう？はやてちゃん）

（あかん、完全にはれとるがな）

「それに前回のランクアップ試験も、あなた達は手を抜いていた節がありますね」

レティ本部長は見抜いていた、彼女たちの本当の強さを。

（まずいよー、なのはー）

（まいったね）

（あちゃー、こっちもばれとるがな）

（おい、シグナム、何かこの場を言い逃れる良い方法はないのかよ？）

（無理だ、しらふのあの人に頭で勝てるとは到底思えん）

「来週試験を行います、準備しておく様に、試験内容は、ヴィータがS、他の4人はSSSよ、ユニゾンも許可します。それと、絶対に手抜きしないように、きちんと見てますから」

「了解ましたー！」

一同、声を揃えて返事をするしかなかった。

「なお、これは全員が合格することを条件とするが、高町一尉、八神二佐がそれぞれ提出した例のプランについて……私がGOサインを出します」

なのはが「え！？」と驚きの表情をする。

「ほんまでつかー？、ほな頑張って合格せなあきまへんなあ」

（相変わらず、はやてはスゲーな）

（主の立ち回りの巧さには、正直呆れる）

「え？、え？、いったい何のこと？」

フェイトは、何が何だかよく分かっていない様だ。

「高町一尉、あのプランでは正直言って不足よ、手直ししておいたのもう一度作り直して提出する様に。書類は既に教導隊に送っております。」

フェイト執務官には試験終了後に特別任務があります、以上、全員

退室してよし」

「失礼いたしましたー」

一同本部長室を後にする。

「もう、出てきても良いわよ、アコース査察官、しかし相変わらずの策士ね？」

「あなたも、なかなかの役者でしたよ？」

僕はただ、彼女たちにもっと人生を楽しんで欲しいだけですから、あ、ケーキ食べますか？、よろしければ紅茶もありますよ」

「頂こうか？」

プロローグ（後書き）

どおやらアコース査察官が一枚咬んでいるようです。

そして……

書類データを受け取ったのはは、とんでもない手直しに驚くのだった。

特別戦技教導学校（前書き）

手直しの書類にはとんでもない事が書かれていた。
特別戦技教導学校を新設するという。

一方、ティアナが追いかけていた強盗殺人事件の犯人が判明する。

特別戦技教導学校

「ねえ、なのは、例のプランって一体何のこと？」

「後で話すね、それより、みんなここでちょっと待ってて、ヴィヴィオ呼んでくるから」

なのははそう言つて転送ポートに駆け込んでいった。
暫くしてヴィヴィオとなのはが転送ポートから出てくる。

「みんなー、お待たせ」

「みなさーん、ご機嫌よー」

「お、ヴィヴィオ今日も無限書庫か？ええ本有ったかー？」

「うん有ったよー、ちょっと危険ちつくな香りのする魔道書、今解読中」

「ダメだよ、あんまり危ない本に手を出しちゃ」

「大丈夫、ママのデイベインバスター乱射よりは、よっぽど安全だから」

「あのー、ヴィヴィオさん？それはどれ位危険で、どれ位安全なのか基準がよく分からないのですが……」

フェイトが突っ込む。

「さて、突っ込みも入った所で、お腹も空いたし、帰りながら外で食事にしよう、例の話もあるし」

なのはの提案で、取り合えずファミレスに移動となった。

とあるファミレスにて

「シチューハンバーグ定食三つに、オムライス、甘口カレーに唐揚げ定食おまじどう様です」

「じゃあ食べながら話そうか」

なのはが促す。

「例のプランて？」

すかさずフェイトが尋ねる。

「それは私から話すわ、あのな、首都防衛隊の中に自由に動ける元六課の様な組織を作りたいんよ。

今度は捜査とかは一切なしで、戦闘専門、部隊長が私で、現場隊長がシグナムや」

はやては、出勤に手続きや細かい承認が必要な現在の防衛隊とは

別に、自由に出動出来る遊撃部隊を作ろうというのだ。
しかも、人材制限を無視した、リミッター制限のない強力無比な部隊を……

JS事件の反省から、大規模テロや凶悪犯罪者に迅速に対応出来ることが管理局に求められてきたが、管理局内の内規や規定を大幅に改訂する必要がある、その手続きすら、ろくに進んでいない現状にあった。
ならば、手続きが済んで出動してくるまでの時間を埋める部隊があればいいだけのことだ。
部隊の業務としては、防衛ラインの維持による時間稼ぎ、敵勢力の殲滅・鎮圧、容疑者の確保、人質や盗品の奪還、臨時の要人警護などである。

「でな、やっぱり人材制限がネックなんよ、シグナムの隊長は既に認めてもらえたけど、
これ以上SSスクラスの保有は認められないって言われたわ、
せやから、なのはちゃんとフェイトちゃんは同じ部隊には呼べへんのよ、
まあ、どのみち、AかAAクラスの隊員が最低2名、出来れば5〜6名欲しい訳なんよ」

「で、そうなると元六課メンバーを呼び戻す……と？」

フェイトがちよっと嬉しそうに尋ねるが……

「所が話はそう簡単に行かない訳で、向ここの隊長さんに打診してみただけど、
代わりをよこすまでは前線メンバーを返してくれないってゴネてるし、

なかなか思う様にはいかない訳、ティアもいっぱい凶悪事件抱えてるしね」

なのはが渋い顔で答える。

「そこであたしらが、新たに新人教導で人材育成をしようってプランをぶち上げた訳だ」

そこまで偉そうなことでもないのだが、ヴィータが胸を張る。

「期待しているぞ、高町教導官」

「シグナムさん、あんまりプレッシャーを掛けなくて欲しいな？
で、はやてちゃん、本部長の返事はいつ聞いてたの？」

「さっきな、転送ポートの前で待つとる時や、ロツサがな、本部長にパシリにされたーゆって伝えに来てくれたんよ、
ついでに書類の手直しも喰らったわ、せやけどな、この話は全員が来週の試験にパスすることが前提条件なんよ。

一人でも落ちたら予算はつけてもらえんし、この話は無かったことになる、とにかく何が何でも合格有るのみや！」

「ママたち、がんばって」

「あはははー、あんまりプレッシャーを掛けなくて欲しいな」

「所で、私は何の為にあそこに呼ばれたの？私はそのプランとは関係ないのに何故？」

フェイトが尋ねる。

「あ、それはね、事件の後片付けをお願いしたいな……と」

冷や汗ながらに、なのはが答える。

「犯人逮捕した後は、事件の捜査指揮はフェイトちゃんか、ティアナの所へ優先的に回す様にプランが組んであるんよ」

「つまり、美味しいとこだけ持って行って、後片付けが私の役目？」

「あははははー、そ、そうなるかな？」

はやてが、笑って誤魔化す。

「でも大きな目で見たら、機動六課を大所帯にした様な物だよね」

「お、ヴィヴィオ凄いなあ、ナイスフォローや、たとえ所属は違っても全員が協力すれば機動六課と同じ言うことや」

「さて、お腹もいっぱいになったし、話も大体済んだ所で、この辺でお開きにしますか」

なのはがその場をしめた。

帰りがけに書類データを受け取って帰宅するのはたち

「じゃあヴィヴィオ、お風呂の前に少し組み手やろうか？」

「はい」

最近ヴィヴィオは、ストライクアーツの練習以外に、なのはから組み手の指導も、受けていた。

でも、なのはには、まだ指一本触れたことがないほど、実力差があった。

スバルやティアナが遊びに来ると必ず、なのはと模擬戦をやる。しかし、距離を詰められてからの、なのはは強かった。

砲撃が一切使えない距離、スバルの間合い、その中で、レイジングハートをリリースして素手で戦う。

どんな攻撃も、受け流すか綺麗に受け止めてしまう。

普通の格闘技とは違う、ステップを刻まない、氷の上を滑るかの様な独特の歩法、

まるで、二人でワルツを踊っているかの様に、相手を自分の動きに巻き込んで動けなくしたり、

手を掴んだその次の瞬間には、投げ飛ばしていたり、溜もなく大きなモーションもないのに、

考えられない様な重い打撃が来たり、それは、自分の知っているのとは、まるで別次元の魔法の様に見えた。

それを見ていたヴィヴィオは、どおやら、新しい格闘技として覚えなくなったようだ。

投げられまくるヴィヴィオ、でも受け身はだいぶ上手くなった。

「うー、組み手の後のお風呂はしみる」

「なのはママは厳しすぎです」

「あはははー、ちょっとやりすぎた？」

「フェイトちゃん後と一緒に書類を見て欲しいんだけどいいかな？」

「コンソールを操作するのは」

「えと、書類の提出期限は1ヶ月後……と、余裕だね？え、何これ？」

「うわー、大変なことになってるね、明日ヴィータと話してみたら？」

「そうするよ、これは大変なことになりそうだ」

翌日、教導隊隊舎にて

「おいおい、これじゃあ全く別物のプランじゃないか？はじめは15人ぐらいからだろ？」

「確かにこれは凄いね、でも、レティ本部長は本気なんだ、管理局全体をレベルアップすることに」

当初、ヴィータとなのはで、選抜された15名程度の新米魔導師

を、
1年間掛けてAAクラスまで育て、管理局へ供給する計画だった物が、
いつの間にか、年間供給予定120名、40人一クラスで1学年3クラスの2学年制、
教導学校とし、独立部隊とすると手直しされていた。

実際問題、管理局では魔法が使えなくても執務官補佐やそれ以上の役職に就いている者も多い。
また、執務官や捜査官、現場の隊員の中で魔導師レベルの低い者も多く、
そう言った低いレベルの者が数多く殉職している現状があった。

教導隊では、毎月3週間ずつ、同じレベルの魔導師を集めて実践教導しているが、現場から見れば年に1回の研修である。
これで大幅なレベルアップが図れるはずもなく、深刻な人材不足は解消されないままになってる。
レティ本部長は、初めから高いレベルの者を数多く採用し、低いレベルの者は長期教導でレベルを上げ、全体として人材の穴を埋めていこうという考えである。

なのはの教導学校は、士官学校と教導隊の間に位置づけられることになるらしい。

校風としては、体育大学的な魔導師の専門学校という感じだ。

「あ、なんか添付ファイル付いてる」

『校長：高町なのは、教頭：ヴィータ、1組アタッカー、2組ガード、3組バックス、人選は高町校長に一任』

「だってさ、よろしく頼みますよ、高町なのは校長！」

「ヴィータちゃんこそよろしくね、教頭先生！はぐでも実際どうしよう？一月で企画書を書けるかな？」

「まだ一月もあるんだぜ？何とかなるって？それにあたしら今週は思いっきり暇だしなー、

教導終わったばかりだし、あ、なのは明日から連休なんだっけ？

まあゆっくり休んでそれから考えな？休み明けには例の試験もあるしな？」

同時刻、時空管理局本局・刑事局長室

「よく来てくれたティアナ・ランスター執務官、実は、今君が抱えている何件かの強盗殺人について情報が入った所だ」

「刑事局長、何か有力は情報でも？」

「犯人が分かった、非常に凶悪な奴らで、資料はここに纏めてある。明日の朝一でミッドチルダに行ってくれ、先ほどこいつらがミッドチルダに入るのが目撃された」

「了解しました、すぐに準備します」

「それから、もし逮捕出来そうもなければ逮捕しないでいい、主犯格2名については殺害指令が出ている、分かるね？」

「重ねて了解しました」

特別戦技教導学校（後書き）

お気楽なヴィータなのは、しかし、ティアナはかなり雲行きが怪しいようです。

マغدゥーネル事件（前書き）

ついに起きてしまった事件、なのはの取った意外な行動とは？
そして語られるスバルの苦い経験。

マグドゥーネル事件

翌朝、次元航行旅客機の中

「まったく、転送ポートぐらい使わせろっての、これだと時間がかかって仕方ないのに……」

お昼には着けるかな？

まあ、ゆっくり資料が見られるから良いけど……」

捜査資料

マグドゥーネル一味

兄：トミー・マグドゥーネル、長身、やせ形、ロン毛、ワカメ頭、目つきが危ない。

弟：アビー・マグドゥーネル、巨漢、スキンヘッド、顎髭、目つきが悪い。

手下が4名

手口：大型のナイフと実弾銃で武装、必ず子供2名を人質にとって強盗、犯行中に人質1名を殺害、

逃げ切ってから、もう1名を殺害、犯行に巻き込まれた被害者が何名か射殺される。

犯行：現在28件の強盗殺人、93人の死亡者を出している、うち2名は捜査官と執務官、いずれもBクラス。

「とんでもない凶悪犯ね、殺害指令が降りるのも納得だわ？まだ3時間以上有る、ちよっと眠っておこ」

同日昼下がりの商店街

「結構買ったねー、夕ご飯が楽しみ」

ヴィヴィオが嬉しそうだ。

「後はその辺でお茶してから帰ろうか？」

なのはがそう答えた直後だった。

通りの向かいの銀行から銃声がした。

なのはは、咄嗟にヴィヴィオを抱きかかえると、目の前の喫茶店に飛び込んだ。

「すみせん、私は管理局員です、目の前の銀行で強盗事件が発生している模様です、流れ弾の危険がありますので皆さんはここを動かないで下さい！」

いい、ヴィヴィオ、ママが戻るまでここを動いちゃダメだよ、それからお店の外にバリアとシールドを展開して、みんなを守ってくれるかな？ヴィヴィオなら出来るよね？」

そう言つて、なのはは飛び出していった。

このとき、店に居合わせた数名の客とマスターとヴィヴィオは、これから起こる凄惨な事件の一部始終を目撃することになるうとは、思っても見なかった。

「レイジングハート、エクセリオンモードでセットアップ」

「Yes Redy」

丁度、強盗たちが外に出てくる所だった。

「オラオラ、道を空ける！この子みたいになりたいかー！」

手下たちが、銀行の中や通りに向かって拳銃を乱射している。

4、5才ぐらいの男の子が背中から大型のマチェットナイフ（
で突き刺されてぐったりしている。

ナイフは腹まで貫通している。

ナイフを手にしているのは、スキンヘッドの巨漢だった。

（マチェットナイフ：蛮刀とも言つ、刃渡り約50cm）

「シュート！」

光弾が三つ飛んできて2発は彼らの足下で炸裂、1発は逃走用の
車に命中し爆発炎上する。

更に遅れてもう1発、彼らの足下で炸裂した。

次の瞬間、刺された子供は地面に倒れていた。

そして、スキンヘッドの巨漢が腹をストライクフレームに突き刺さ
れ天高く持ち上げられていた。

逃げ遅れた周囲の人々にも、いつの間にか保護バリアが掛けられて
いた。

「あなた達、強盗殺人の現行犯よ人質を解放して投降しなさい！
投降の意志がなければ、この場で処刑します」

なのはだった、光のない冷たく座った目で彼を見上げていた。

「げふっ、お……俺にこんなことして……た……ただで……済むと……思う……なよ。」

「エクセリオンバスター」

冷たく言い放ったその刹那、彼は光に包まれ「ドンッ」と爆発した。

爆煙が上がり、千切れた手足や頭部が路上に転がり、細切れになった内蔵やら肉片やら骨やらがボタボタと落ちてくる。

一瞬、ザァッと血の雨が降る。

血の雨に濡れた彼女の姿は、あまりに美しく、儚な気で、この世の何よりも恐ろしかった。

「てめえ！この子を刺すぞ！」

ワカメ頭の男が3才ぐらいの女の子にナイフを突きつけていた。

「よくも弟を……って、あれ？いない？」

「遅い！それに首がガラ空きよ」

彼女は既に彼の後ろに駆け抜けて、レイジングハートを振り抜いていた。

エクセリオン、それは突撃槍を差す言葉、ストライクフレームは槍の穂先なのである。

通常、巨大な砲撃しかない彼女にとっての唯一の近接戦闘が出来る武器はこれしかないのだ。

そして、これこそがストライクフレームの本来の使い方である。

ワカメ頭の首がポロリと地面に落ち、ドシューと盛大な血の噴水が上がった。

「まだやる？次は誰が死ぬのかしら？」

冷たい殺気の籠もった視線が3人の手下たちを貫く。

手下たちは、もはや動くことが出来なかった。

下手に動いたその瞬間、首を切り落とされるか、爆死するのか、既に自分たちの命は彼女の手の中に握られていた。

その直後、「ガシッ」突然彼らにバインドが掛けられた。

「容疑者確保に御協力頂き、ありがとうございます、ティアナ・ランスター執務官であります」

ティアナだった。

「なのはさん、ご苦勞様でした、ここからは私が引き継ぎます」

ティアナも恐ろしかった、もし、下手なことをすれば自分も殺されそう、もの凄い殺気を身に纏ったなのはさんが

目の前に立っているのだ、冷静に装っても、膝の震えが止まらなかった。

ティアナはタクシーで移動中だった、空港から108部隊へ向かう途中、前方で起きた爆発に事件だと気付いて

タクシーを降り、走ってきたのだ。

今、彼女に出来ることは、一生懸命になのはの目を見つめること

だけだった。

幸いにも、なのはさんの方から視線を外してくれた。
だが、その視線の先では……

「お兄ちゃん起きて」

血まみれになった小さな女の子が、自分の兄を起こそうと体を揺さぶっていた。
慌ててなのはが駆け寄る。

呼吸と脈を確認する。

弱々しいが、脈はまだある、自発呼吸もかすかにしている。
しかし、体が冷たくなり始めていた。

なのはの目から大粒の涙が溢れる。

「ごめん、もう私は……あなたを助けてあげることが出来ない」

この子を抱えて飛んだとしても、とても間に合いそうにない状態だった。

絶望し、うなだれようとした瞬間、彼女の頬をひっぱたいた人影があった。

「諦めないで下さい！絶望しないで下さい！あなたが絶望したら、この子まで絶望しちゃうじゃあないですか！」

スバルだった。

事件の一報を聞いて全速力で走ってきたのだ。

現場からレスキュー隊の隊舎はすぐ近くだったのだ。
後ろから何台もの救急車が走ってくるのが見える。

「でも、私が飛んだとしても、もう間に合わない、助けられないよ」
「そんな言葉口にしないで下さい、あなたが諦めてどうするんですか？」

私に諦めない勇気を教えてくれたのは、あなたなんですよ！
諦めちゃったらそれで終わりだけど、信じれば奇跡は起こります！
絶対に奇跡を起こします！」

そう言い放ったスバルの強い目の光りに、なのはは、この子が助かるであろうことを確信した。

話している間に、スバルは手早く点滴を子供の腕に取り付けていた。

「なのはさん、回復魔法をお願いします、少しでも時間を稼いで下さい」

子供の手首には茶色のカラータグ（ ）が付けられている。

スバルがモニターを開く。

「キャラ口緊急事態だ！この前話したあれをやる、ぶつつけ本番だけ出来るね？」

「分かりました、でも、遠隔操作はまだ不安なので私もそちらに行きます、」

隊長「緊急出動でスバルさんの所へ行ってきます！」

（え？ 辺境世界からここまで半日以上かかるんじゃないあ？）

そう思った直後、なのはたちの前に召喚魔法陣が輝いてキャロが飛び出してきた。

スバルはモニターを切り替えていた。

「院長先生、この前ご相談したあれを実行します、準備はよろしいでしょうか？」

ああ大丈夫だ、手術室は三つ、スタッフは4組準備を始めている、後2分もあれば完了する、状況は？」

「茶色1名、男の子5才ぐらい、背中から腹部に大型の刃物貫通、大出血意識なし、脈拍呼吸とも非常に弱い、体温も低下しています。現在昇圧剤入りの輸液と、回復魔法で時間稼ぎをしています」

「転送、聖王病院手術室前！」

魔法陣が輝いた。

（カラータグ：傷や症状の度合いを色で示した物、緑は最も軽傷、黄色、オレンジ、赤、茶、黒が死亡となる）

「この子のご両親は？」

女の子を抱きかかえてなのはが訪ねる。

父親は肩を撃たれて苦悶の表情をしていた、母親は右胸と脇腹を弾が貫通し、意識がなかった。

「院長先生、茶色1名、赤1名、それと無傷の女の子1名まとめて転送します、さっきの子のご家族です」

「転送、聖王病院手術室前！」

「黒1名！」

他の隊員が叫ぶ。

銀行の警備員が頭を撃たれて即死だった様だ。

これでもう、聖王病院は使えない。

その時スバルの横にモニターが開いた。

「こちらも受け入れ準備OKよ、10人ぐらいなら平気、どんどん送ってちょうだい」

シャマルだった。

「おーし、緑の人は救急車で応急手当したら帰ってもらえ！黄色は手当て後搬送だ！オレンジ以上は転送すつぞ！」

ヴォルツ指令が怒鳴っている。

そうしているうちに108隊の装甲車が到着した。

転送作業を終えたキャロが辺りを見渡して卒倒した。

そりゃそうだろう、足下には、もの凄い状態の死体が転がっているんだから。

「ねえ、スバル、よくこんなこと考えついたね」

「私じゃあないです、この子なんです」

スバルは膝枕しながら、キャロの頭を優しくなでて語り始めた。

先月のことだった。

休みの日程を合わせ、エリオとキャロがスバルの所へ遊びに来たのだ。

しかし、スバルは部屋の隅でブルーな空間を作って沈んでいた。キャロやエリオが励ましても、余計に落ち込むばかりだった。

前日の出勤で、助けられなかった命があった。

首都高速湾岸線での多重衝突、

単独事故を起こした1台に、次々と乗用車が激突、最後に大型トラックが突っ込む11台が絡んだ事故となった。

原形を留めないまでに拉げた車、その隙間から血が滴り落ちていたり、千切れた手が落ちていたり、

現場は、まさに修羅場だった。

ふと、拉げた車の中に生命反応を見つけた。

リボルバーナックルを装着し、あらん限りの力で車の天井を引っぺがす、

そこに小さな女の子を見つけた、しかし、顔色が恐ろしく悪い、慌てて抱き上げると、かろうじて意識があった。

「…………お…………お姉ちゃん…………あ…………ありがとう…………」

それが彼女の最期の言葉だった。

突然ガクンと力が抜け、手足がだらりと垂れ下がる。

意識を失ったのかと思った、確認するともう心臓も呼吸も停止していた。

「誰かカウンターショックを！」

心臓マッサージもした、人工呼吸もした、しかし、一度止まった心臓はもう二度と動くことはなかった。
絶望に打ちひしがれそうになった時だった。

「ボサツとしてんじゃあねえ！俺たちの仕事はこの現場から生きている人を少しでも早く助け出すことだ！
泣きたければ後で泣け！自分の使命を忘れてんじゃあねえぞ！この
タコ！」

ヴォルツ指令だった。

結局、トラックの下敷きになり、拉げた乗用車2台に乗っていた5人が犠牲になった。
あの子も、あの子の両親も即死だった。

現場から帰ってきて、力無く自分のベッドに倒れ込む、ただボートとしていた、
ただボートと自分の指先を見つめていた。
手の中に、さっきの女の子が浮かんできた。

「…………お姉ちゃん…………あ…………ありがとう…………」

頭の中を言葉が過ぎる。

だんだん涙が溢れてくる、スバルは慟哭した、その慟哭を、窓の月だけが優しく青く照らしていた。
自分の腕の中で消えてしまった小さな命、どうしてこの子が？悔やんでも悔やみきれなかった。

悲しくて、悔しくて、どうしようもなく情けなかった。

「せめて一瞬で病院に運べたなら、もしかしたら助けられたかもしれない」

スバルがそうこぼした。

転送ポートを持ち運べたなら状況はもっと改善するだろう。しかしあれば、そう簡単に持ち運べる物じゃあない。

海鳴市にある転送ポート4カ所は、いずれもポートのモジュールは地上に出ていて小さい物の、システム本体は地下に埋まっていてかなり大きな物だ。トレーラー2、3台分かそれ以上、小さな雑居ビル位はある。本来、ビルの中や、戦艦に設置して使う物だ。

「そんなことでしたら、簡単に出来ますよ」

そう言ったのはキャロだった。

「腕の良い召喚魔導師は、転送魔法も得意なんです」

初めは何を言っているのか分からなかった。

「私がここから消えたら、外の駐車場を見て下さい」

そう言うと、キャロは魔法陣の中へ消えていった。直後、窓から下の駐車場を見ると、魔法陣が輝いてキャロが出て来る。

そしてまた、スバルの目の前に帰ってきた。

「それってキャロだけじゃあなく、他の人や物にでも出来るの？どれ位の大きさの物まで運べるの？」

「出来ますよ、何の問題もなく、大きさはボルテールより小さくて軽ければ全然平気です。」

「タダ、いろいろ細かい条件がありますが……」

「細かい条件って？」

「たとえばですね、管理局の許可無く次元の壁を越えると次元管理法違反で捕まります。」

「本局のオペレーションセンターが常に監視してますから、完全にばれますね。」

「違反すれば、すぐにウオッチャーと呼ばれる人が確認に来ます、まあ、姿は見せないでしょうが」

「召喚獣も、予め許可が取ってないと、勝手に呼び出せないらしい。」

「他にも条件はいろいろあるのだが、大まかにはそんな感じだ。何故そこまで厳しく召喚魔導師を規制するのか？」

「それは、密輸物や武器、危険物を持ち込ませない為、誘拐や侵入、窃盗などの犯罪を起こさせない為である。」

「そのため、召喚魔導師の地位は低く、常に監視されている状態にあった。」

「条件は、スバルにとって何の問題になる物でもなかった。もう完全に、どこでもドア状態だった。」

「うれしかった、慌ててヴォルツ司令に連絡を取る。」

手短に話すと、今度はシャルと聖王病院にも話をした。

後は、管理局の許可を貰って、実験を成功させるだけだった。
今月の終わりには、実験をする予定でいたのだ。

それがまさか、こんな形で本番になろうとは、思っても見なかった。

結局、軽傷（緑）4名、軽傷（黄色：入院または検査が必要）3名、重傷（オレンジ：命に別状なし）5名、
重傷（赤：命の危険有り）3名、重体（茶色）2名、死亡（黒）1名の被害者を出して事件は集結した。

事件発生から患者の転送完了まで15分というスピード解決となった。

「GINGAさん、こいつらの護送お願いします」

「あれ？手下は4人じゃあなかった？」

「あ、もう一人は、あそこでこんがりローストされてるっすよー」

ウエンディの指さした車の運転席で、焼死体となっていた様だ。

「ねえ、レイジングハート、ちょっとやりすぎたかな？」

「Don't worry」

「あ、いつけなーい、ヴィヴィオのことすっかり忘れてた」

それは、なのはのうっかり癖だった、血だらけのジャケット姿でヴィヴィオを迎えに行ったのは不味かった。

いくら笑顔でも、その血糊と殺気は尋常じゃあない、店内が一瞬で凍り付く。

その姿を見たヴィヴィオもまた卒倒してしまった。

この事件は後に「マグドウーネル事件」と呼ばれる様になる。

マグドゥーネル事件（後書き）

まさか、なのはさんが犯人を殺してしまうとは（驚

日本では、犯人を説得して時間を掛けて逮捕に至ることが多いですが、人質が命の危機にある場合、

外国では、犯人は即射殺です。問答無用です。

外国のSWAT隊の場合、まず逃がさない様に足止め、直後に目くらましを入れて、犯人のみ射殺、

と言うのが当たり前に行われています。

ここでは、なのはさんに、一人SWATを演じてもらった訳です。ちよつと衝撃的だったかも知れませんが、日本の基準で考えて欲しいではないです。

それに、彼女は戦技教導官です。

ケースバイケースでしょうが、今回の様な場合、彼女が教えることは「確実に殺せ」です。

犯人と確実に1対1なら、「KOして逮捕しろ」と教えるでしょう。警察も、軍隊もそんなに甘い所ではありません。

そして、それを教える以上は、自分自身がそれを実践出来なければ意味がないのです。

人に物を教えると言う事はそれだけ厳しいのです。

次回、ヴィヴィオとの絆にヒビが……スバルが優しく修復してくれます。

親子の絆、なのはの決意（前書き）

自分のベッドで目覚めたヴィヴィオ、でもなのはが怖くて近付けなくなってしまう。

そこへスバルからの通信が入る。

親子の絆、なのはの決意

ヴィヴィオが目を覚ましたのは夕方だった。気が付くと自分の家のベッドの上に寝ていた。

さっきのあれは、一体何だったんだろう？一瞬そう思った。

もしかしたら、悪い夢だったんだろうか？

モニターを開いてニュースを見ると、事件のことを中継している。やはり、夢じゃあなかった。

以前、ティアナとスバルから話には聞いていた。

「あの人は魔王だ、怒らせれば血の雨が降る」

などと散々聞かされてはいたが、とてもあの優しいママからは想像が付かなかった。

だが実際にそれは起きてしまった。

そして犯人とはいえ、目の前でとてつもない惨劇が繰り広げられた。

まだ信じられない気持ちで、階段を下り、1階に行くところに、なのはの姿があった。

なのはに駆け寄ろうとした瞬間、さっきの姿がちらついて一歩踏み出した所で動きを止めてしまう。

その姿を見て、なのはが手をさしのべる。

しかし、ヴィヴィオは首を横に振りながら「イヤッ」と拒否してしまった。

明らかに怯えていた、親子の絆にヒビの入った瞬間だった、そんなヴィヴィオの姿を見て、

なのはも、また深く傷ついてしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

お互い声にならない状態で、必死に言葉を紡ごうとした。
さしのべた手が中を泳ぐ、

でも、掛ける言葉が見つからない。

その瞬間、モニターが開いた、スバルだった。

「なのはさん、奇跡が起きましたよ、あの子もお母さんも助かった
そうです、手術は無事終了しました！

後5分救出が遅れていたら、二人とも助からなかったかも知れない
そうです」

なのはの目から暖かい物があふれ出す、それを見たヴィヴィオが
泣きながら抱きついてきた。

二人で泣いた、スバルの目の前で、それを見たスバルもまた貰い泣
きしてしまう。

ひとしきり泣いて泣きやんだ時、お互い見つめ合い、初めて言葉が
出た。

「もう、怖くないよね？」

「うん」

そこには、いつもの仲良し親子の姿があった。

「ねえスバル、今日はありがとね、スバルがいなかったら私多分絶

望してた、絶望してあの親子を死なせてた。

私はね、ただ魔力が強いだけで、砲撃しか取り柄のないタダの馬鹿だわ」

「そ、そんなことないですよ、今日だって悪い奴らをやつつけたじゃないですか？

なのはさんがいなかったら、救出すら出来なかったと思いますよ、犠牲者だってもっと増えていました」

「あ、あれはね、刺された子供を見て、もう殺るしかないと思ったの、

本当は殺したくはなかったけど、あれ以上長引かせる訳にはいかな
いし……

マニュアルにもあるでしょ？」

対凶悪犯対応マニュアル

- 一つ、犯人を過剰に刺激しない
- 一つ、犯人を逃がしてはならない
- 一つ、人質を交渉材料にさせてはならない
- 一つ、人的被害は最小限に留める
- 一つ、状況によっては、犯人殺害もやむなし

「でもね、そんなマニュアルよりも、犯人を許せなかったの、マニュアル通りの行動かも知れないけど、自分の怒りにまかせて力を使ってしまったの、

許せないっていうだけで3人も殺しちゃうなんてどうかしてるよね、魔王って言われても仕方ないよね」

「卑屈にならないで下さい！」

「あいつらは射殺命令の出た極悪人です、それに私はその魔王の弟子2号です！

1号はティアですけど……その弟子2号があなたの教えを守って数多くの人命を救っているんです、もつと胸を張って前を見て下さい！」

また、なのはの目から涙があふれ出す。

（本当にありがとうね、スバル。）

ヒビの入った親子の絆も、傷ついたなのはの心も、スバルという絆創膏がふさいでくれた、癒してくれた。

今、のどから手が出るほど彼女のことが欲しかった、もう一度自分の下で働いて欲しいと思った。

でも、それは許されないこと、あの子は命の現場に最も必要な人間、自分の手元に置いておくことは許されない。

なのはは、ぐっとそれを飲み込んで話し始めた。

「ねえスバル、今はまだ話せないけど……多分、1〜2年以内にはあなた達の必要とする物をなんとか出来ると思う。

絶対に見せる。期待して待つていいよ、今日は本当にありがとうね、スバル」

そこで通信は切れた。

スバルは本当に強くなった、絶望することの許されないレスキューの現場で、どれほどの絶望を味わってきたのだろうか？

その絶望を踏み越えてなお、レスキューの現場に立ち続ける、どれほどの勇気が要るのだろうか？

それに比べて自分は何だ、無敵のエースと呼ばれて、いい気になっ

ていただけだった。

小さな命一つ救えなかった、救うことを諦めてしまった自分が情けなかった。

これほどの挫折は、落とされた時以来だった。

（今度の試験、絶対に受かる、受かって前に進むんだ！）

強い決意が彼女の胸に芽生えた。

「ただいまー」

「あ、フェイトママ」

「どうしたの？そんなボロボロになって……」

シグナム、ヴィータと共に最終特訓をしてきたらしい。

「明日は1日完全休養して試験に臨みます」

「じゃあご飯にしようか？今日はカルボナーラとグリーンサラダね」

（当分は、お肉もケチャップも使えそうにはないかな？）

同じ頃、

「あ、目が覚めたみたいっす」

「大丈夫だったか？姉は心配したぞ」

「明日、スバルが辺境世界まで送っていつてくれるってさ。」

キャラはナカジマ家で目を覚ました。

翌日、ティアナが高町家を訪れる。

「昨日の事情聴取に来ました」

「周辺の防犯カメラの映像は？」

と、なのはが尋ねる。

「はい、既に回収してあります」

「じゃあこれが、レイジングハートの記録した映像ね」

「助かります」

「おはよーティアナさん、ご苦労様です」

「おはよう、ヴィヴィオ」

「実はティアナに頼みがあるんだけど、まだこっちに居るのよねえ」

？良かったら明日ここに泊まってくれない？

私とフェイトちゃんは明後日の夕方まで出張でいないからヴィヴィオの相手して欲しいんだよね、

アイナさんも頼めそうにないし……」

「別にいいですけど」

ティアナがそう答えた時だった。

「その件なんですがー、明日は教会に泊まることになりそうです、さつきオットーから連絡有ってー、

明日と明後日の放課後は、公務が入りました」

『公務』とは、聖王ヴィヴィオとして、病院や福祉施設などを慰問することである。

これは、教会のイメージ戦略と、彼女が将来、聖王陛下に即位して頂くための準備でもあった。

今回の公務は、マグドウェーネル事件の被害者への慰問であった。

「私は別にかまいませんよ、今、スバルの所に泊まってますから、事情聴取は、帰ってきてから改めてお願いします」

親子の絆、なのはの決意（後書き）

スバルが美味しいです。

美味しい役回りを演じていていいです。

こんな子をお嫁さんにしたいです。

次回、ヴォルツさんがやってきます。

ヴォルツ指令土下座する（前書き）

「なのはさん、お願いです、あのキャロって子をうちに下さい！あの子は命の現場には、なくてはならない子なんです！」
「どうかお願いします！」

ヴォルツ指令が土下座した。

ヴォルツ指令土下座する

数日後の本部長室

「フェイト執務官、特務よ！」

実は、次元航行隊のパトロールスケジュールが外部に漏れています、どうやらネズミがいるらしいの最近は、次元海賊やマフィア達が大规模なギルドを組み始めているらしく、

情報は彼らに漏れているみたいなの、海の方はクロノ提督が調査を開始しています、

本局とミッド地上本部の方をお願いしたいけどいいかしら？」

「了解しました」

同じ頃、教導隊隊舎

「事情聴取にご協力ありがとうございました。で、試験の方はどうだったんですか？」

「もうバッチリっていうか、本当のこと言うと私ら5人、本当の強さを隠してただけなんだよねー、

それが本部長にばれて大目玉食らったって言うのが真実かな？」

「え………どういうことでしょうか？」

「昔ね、管理局入りした時にランク試験受けるでしょ？」

あの時ランクが高すぎて、この先ランクアップすれば、みんな同じ部隊には絶対になれないって言われたの、

それでね、ばれない様に手を抜こつて話になったって訳」

「えっ……じゃあ六課にいた頃あんなに強かったのはやっぱり……
そう言うことだったんですね？」

「でもね、そんな私たちとあれだけやり合えたあなた達も相当強く
なったのよ、

でね、ティア、ちょっとお願いがあるんだけど……聞いてもらえる
？」

なのはは学校構想について話し始めた、そしてティアナも教師の
一人に加わって欲しいと頼んだのだ。

他にもエリオとキャロ、シャマルもメンバーに加えるらしい。

他にどんな人たちが集まるのか分からないけど、何だかとても楽し
そうだ。

「今すぐに返事は出来ないけれど、是非とも参加させて下さい」

うれしそうなティアの顔を見て、なのはも笑い返す。

そこへスバルが入ってきた。

「あれ、スバル何しに来たの？」

「ティア、実はねスバルに私、キャロの4人は来月の公聴会の時、
本部長表彰をしてもらえることになったのよ」

事件のことが、かなり大々的に報道されて4人は英雄になったの
だ。

それを伝えたくてスバルを呼んだのだ。

でも余分なのが付いてきた。

ヴォルツ防災指令だった。

彼は、なのはの前に来ると突然土下座した。

「なのはさん、お願いです、あのキャロって子をうちに下さい！
あの子は命の現場には、なくてはならない子なんです！どうかお願いします！」

漢ヴォルツ、一世一代の土下座だった。

「ヴォルツさん顔を上げて下さい、そう仰られてもあの子をあなたにあげる訳にはいかないんです。

あの子には、人に物を教える素質があるんです、だから私の所へ来て貰おうかと思っています。

でも、あの現場で腕の良い召喚師が必要なことも、身にしてみ分かっていきます。

ですから、キャロに代わる腕の良い召喚師を一人手配しています、手続きと許可が下りるのに少し時間がかかります。

年明けまでには何とかなるかと思えますので、それまではもう少し辛抱して下さい」

「あのー、もしかしてルーですか？」

「その通り、あの子なら使えるよ、召喚や転送の技術だけならキャロ以上だよ」

「なのはさん、ありがとうございます！」

顔を上げたヴォルツは泣いていた、嬉し泣きで顔がぐちゃぐちゃだった。

「やめて下さいよー指令！」

スバルがヴォルツを引っ張って帰っていった。

「じゃあ来月の公聴会で」

ティアナもそう言っただけで帰っていった。

「おい、いいのかよ、あのスバルに伝えなくて？」

「あ、ヴィータちゃん、良いんだよ、ああいうのはアドリブでやらせた方が面白いから」

話は遡ること二ヶ月前、レティ本部長は悩んでいた。

アインヘリアルに代わる新しい首都防衛構想、今後の管理局地上本部の運営とその方向性、何の案も浮かんでは来なかった。そんなとき、ヴェロッサが現れた。

「あのー、こんな書類を止めてる管理者がいますね……捨てられちゃう前に回収してきました」

なのはとはやての上申書と企画書だった。

（これは使える）二人の書類に目を通しながら閃いた、そしてレティとヴェロッサの企みが始まる。

ヴォルツ指令土下座する（後書き）

次回、最終回、スバルが伝説の演説をかます。

エピソード・スバルの大演説（前書き）

「ではここで、4人の英雄を代表してスバル・ナカジマさんに演説をお願いしたいと思います」

「ええ！？聞いてませんよ、原稿も準備してないし……なのはさん……」

しかし、彼女はその後伝説にまで成る大演説をかます。

エピソード・スバルの大演説

11月の某日、公聴会が始まった。

レティは、その演説の中で、首都防衛構想を、強力無比な遊撃部隊の新設とし、人材育成の為の学校を開校する。

今後は、質の高い人材を管理局に提供することを第一とする、と言う運営方針を打ち出した。

そして表彰の後、

「ではここで、4人の英雄を代表してスバル・ナカジマさんに演説をお願いしたいと思います」

「ええ！？聞いてませんよ、原稿も準備してないし………なのはさん………」

スバルは涙目だった。

「おい、高町、何故伝えていない？」

「良いんですよ本部長、どうせ原稿準備したって噛み噛みでろくに喋れやしないんだから、スバル、こういう時は、あの日何があったのか、自分たちに何が必要だったのか、

自分の言葉で思いの丈を聞いている人たちにぶつけておいで、そうすればきっと良い演説になるから」

ここここに緊張したスバルが演台へ歩いていく、演台の前の段差

でど派手にこける。

大爆笑が起きるが、それでかえって緊張が解けた様だった。

スバルは語り始めた、あの日現場で見たこと感じたこと、命の現場に何が必要なのか？

召喚魔導師がいれば何が出来るのか？

召喚魔導師の必要性がどれほど高いのか？蕩々切々と語った。

その演説はだんだんと熱を帯び、気が付けば1時間にも及ぶ大演説となっていた。

しかし、誰も演説を止めたりはしなかった。

終わってみれば、もの凄い拍手の嵐だった。

スバルの大演説は、地上本部に於いて後世に語り継がれることになる。

そして、この演説の果たした役割は大きかった。

数年後、召喚魔導師を各部隊に配置し、戦闘や救助のやり方が大きく見直され、命を落とす者が極端に減っていった。

この功績から、彼女は16年後、防災局長（日本で言えば、消防庁長官）にまで出世することになる。

これが、スバルの伝説と呼ばれる様になるのは、まだ先の話。

公聴会の翌日から、なのはとヴィータは多忙を極めることになる。教員の確保を済ませて、すぐ研修に入らなければならなかったのだ。4月の開校を目指して……

晩秋の空が青かった、どこまでも澄んで、どこまでも高かった。

春々なのはの学校が開校した。いろいろな人々の願いや想いが、

ここに一つの形となつて。

特別戦技教導学校（誇称：School）またの名を、エリート養成所。

なのはの新しい物語が始まる。

T o b e C o n t i n u e d

エピローグ・スバルの大演説（後書き）

いやー参った。

小説なんて、初めて書いたんで、どう書いていいかも分からないし、もうぶつつけ本番の勢いだけで書ききりました。

しかし、内容が重いです。

重すぎて自分でもきつかった……

今回のテーマですが「想い」です。

人が何かを成し遂げようとするには、強い想いがなければ出来ません。

レティの「少しでも殉職者を減らしたい、局を良くしたい」という想い、

はやての「人々を犯罪から守りたい」という想い、

スバルの「誰一人死なせない」という強い想い、

ヴォルツの「部下にこれ以上悲しい思いをさせたくない」という優しい想い、

なのはの「そんなみんなの力になりたい」という想い、

一つの事件をきっかけに、一つの方角へ纏まって行ったらどうなるか？

小説にしてみました。

まだまだつたない文章ですが、今後ともよろしくお願いします。

P S：次回は、特別戦技教導学校編で書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129/>

魔法戦記リリカカルなのは To be tomorrow

2011年9月30日22時38分発行